詩人と画家のあいだで

佐谷和彦

田中清光展は今回で三回目を数える。「田中清光作品展 2000-2004　未開の時空へ」と題し、二〇〇〇年以降の近作を中心に、田中清光の十年間の画業のほぼ全貌を示す大小八十点余の作品を展示するものである。

会期は十一月一日(月)から十四日(日)で午後一時から七時まで。ただし十一月八日(月)は休廊。会場は東京オペラシティ五四階のトップルーム寺田。寺田小太郎さんと共催である。

カタログのテキストは田中清光「未開の瞳に――私と絵画」、佐谷和彦「詩人と画家のあいだで」(あとがき)の二編。田中さんの文章は画家の作品誕生における考え方、その具体的な技法に言及しているのが読みどころで、近作のシリーズ「水界まんだら」「わだつみ」についての詩的なエッセーが添えられている。さすが作者ならではの内容と感じ入った。

田中清光さんの詩人としての歴史は長い。晴世夫人作成のリスト「著作の歩み」(二〇

〇二年)によると、まず詩集の編集・出版で伝説的な人物、伊達得夫主宰の書肆ユリイカから、詩集『黒の詩集』(五九年)『収穫祭』(六〇年)、評論集『立原道造』(五四年)『立原道造の生涯と作品』(五六年)の四冊が立て続けに出版されている。田中さんは当時、八十二銀行で責任の重いしごとを担当し、家族を養いながらの執筆であるから驚嘆せざるを得ない。田中さんの師である串田孫一さんが伊達さんに橋渡しをしての出版である。また田中さんには多くの友人がおられるが、中でも古くからの親友中の親友が同郷の詩人、渋沢孝輔さんで、二〇〇一年の詩集『魂鎮め』にある渋沢さんへの鎮魂歌は、重く私の胸を突く。

著作リストでは一九五四年から二〇〇二年までに、詩集十八冊、評論・随想・編著二十五冊、写真集・詩画集八冊、佐谷画廊の田中清光展カタログ二冊、合計五十三冊を出されている。その後、二〇〇三年の詩集『終わりと始まりと』と今回の展覧会カタログが加わり、現在著作は五十五冊に達する。

詩業に専念するべく一九七六年に銀行を退職された後はさらに精力的にしごとをされ、特に九一年に大病をされてからは『風の家』(九三年)『空峠』(九四年)『東京大空襲』(九五年)『岸辺にて』(九六年)『再生』(二〇〇〇年)『魂鎮め』(二〇〇一年)『終わりと始まりと』(二〇〇三年)と次々に詩集を出版、生と死の問題をテーマに、静かで強靱な精

神力で言うべきを言う詩業に対する識者の評価は高く、数々の賞を受賞されているのは、友人としてうれしい。

さて一方、画家としてのしごとは如何なる展開をしているか？　最初に絵画を制作したのは一九九五年、デカルコマニー「東京大空襲」で、真紅の空と黒い廃虚を表現した作品である。詩集の特装版に添えられていたこのデカルコマニーを見た時、これは尋常ではないと私は驚嘆した。

一九七三年、私は当時勤めていた南画廊で田中さんと出会い、志水楠男さんから銀行員でかつ現代美術に関心を持つ詩人であると紹介された。加納光於や荒川修作、ヴォルス、ポロック、デ・クーニング、ロスコ、ジャコメッティがお好きだということを知り、瀧口修造を尊敬し自宅にも行かれてお話されたことがあるということなどをうかがって、もの静かな話し振りであるが会うたびに話が深まっていく。南画廊から荒川の「ランドスケープ」（一九六七年、油彩／キャンバス、一二一・〇cm×一八三・三cm）の作品を月賦で買い求め、自分の書斎で毎日眺めているという話を聞いた時には、この人はスゴイと驚いた。尋常ではない。その後、銀行を退職し東京でしごとをすることになったと話された時は私自身の体験と照らし合わせ、幸あらんことを祈念したのを

憶えている。

ここで私が言っておきたいのは、田中さんは現代美術について相当な見る能力を持った人物であるということである。一九八一年の私の企画展「第一回オマージュ瀧口修造・物質のまなざし」(詩・瀧口修造、石版・A・タピエスの詩画集「物質のまなざし」を展示)のカタログに、田中さんのテキスト「瀧口修造と物質のまなざし」を寄稿していただいたこともある。私のオマージュ瀧口修造展のカタログはこれまで二十五冊出しているが、おそらくこれだけ水準の高いテキストはそれほど多くはないと思う。また、エッセー「戸谷成雄の仕事、そして詩の問題」(『現代詩文庫一五一　田中清光』一九九八年思潮社刊／初出は「貝の火」三号　一九九六年八月)は、視点の独自さ、理解の深さから見て、戸谷成雄についての美術批評の中で抜群のものである。戸谷成雄はグローバルに通用する第一級の作家であると私は評価しているだけに、このエッセーに共感しその教示に感謝しているのである。

このように田中清光は自らデカルコマニーを制作する以前から、美術について高い見識を持っていたのである。したがって当然、田中さんの制作は詩人の余技ではないし、それは趣味的なレベルではまったくないのである。

今回の展覧会は田中清光の作品の全貌を紹介するものとなるが、作品についての詳細は田中さんのテキストをお読みいただくのが一番である。屋上屋を架すのは無駄なことであるので、ここでは田中さんの作品に対する私の感想を述べることにしたい。

田中さんは絵画が好きである。特に現代美術が大好きである。彼は新しい手法で新しいものを創っていく。しかし基本はデカルコマニーである。アンドレ・ブルトンの古典的なデカルコマニーから、赤とオレンジの空と黒の廃虚をイメージして「東京大空襲」のかなり大判の作品を作り出すのは、むしろ色彩の強さがあってこそ成功したものであって、この点で従来のデカルコマニーの世界を大きくはみ出した。さまざまな状況の中で微妙に変わる瞬間的な取り扱いが、まったく新しい世界を創りあげる。テーマが決まるとさまざまな素材と温湿度環境で制作を試み、夢中になって次々と生まれる新しいイメージを定着していくのである。

田中さんは詩人にして画家である。スタートは詩であるが、では何故、画家となったか？　それは田中さんのテキストの冒頭の部分に示してある。絵画は詩や文章とは異なるが「私にとってきわめて大切な表現である」とズバリといっておられる。では現代美術に親しくなられたのは何故か？　それは「日月抄」(『現代詩文庫一五一　田中清光』二一八頁)に記されている。家庭の病人の対応、銀行のしごとの責任等、重圧で身

動きがとれなくなり、詩のテーマを熟成させる心の状態を持続することができなくなった。その時、前述の加納光於、荒川修作、ジャコメッティ、ヴォルス等の現代美術に深い関心を持つようになったという。この見ることの力が、のちに自らの絵画による表現にまで上昇し、現在もなお新しい世界に進む姿が私には見えるのである。この十年で、表現したいものを自在に生みだしてこられた田中さんの身体が、ご無理のないようにと祈念して結びといたします。

二〇〇四年九月二十八日